

近代和風住宅<高橋萬右衛門家住宅>の障壁画について

正会員 ○平井良直*

障壁画 南宗画 菅原竹侶 文人趣味

同 麓 和善**

1. はじめに

藩政期には仙台領北辺の固めとして要害が置かれ伊達一門の留守家が治めた城下町である岩手県水沢市には、幕末～明治期の住宅建築の遺構に見るべきものが多い。とりわけ明治19年(1886)から23年(1890)にかけて建設された高橋萬右衛門家住宅は、その建築意匠のみならず、ほぼ全室を埋め尽す障壁画も注目に値する。本研究は、当該障壁画の分析を通じて、その構成理念を明らかにするものである。

2. 障壁画筆者

高橋萬右衛門家住宅の各室内を飾る障壁画のほぼ全ては、萬右衛門の知己・菅原竹侶(文政7-明治26/1824-93)の筆になる。竹侶は留守家の家臣。江戸で砲術を修める傍ら南画・諸画派を学び、主家の御用絵師としても活躍する一方、戊辰戦争にも従軍した。維新後は、関東歴遊ののち東京居住と帰郷を繰り返す。この間、滝和亭らとの交流や諸家蔵幅の模写を通じてさらに研鑽を積むと同時に、後進の指導にも努め、水沢地方画壇の形成に貢献した。当該障壁画の制作年・明治23年(1890)は、竹侶の最晩年に当る。

3. 障壁画の構成

各室の障壁画に関するデータの詳細は[表1]に譲り、ここでは専ら画題・画法の検討を行う。

表玄関取付き：《海廊観瀑図》は典拠未詳であるが、蜀栈道を描いた《蜀山行旅図》や、柳宗元「江雪詩」に基づく《寒江独釣図》は、古来、画系画派を問わず好まれた画題である。前二者の款記には明人の画に倣うとあるものの、これら三者は、むしろ清代初期に「四王」らによって確立された正統派南宗山水画様式に拠っている。

表座敷「龍の間」：《輞川図》は、文人画の祖と称される詩人・王維が別荘「輞川荘」周辺の二十景を詠んだ詩を絵画化したという原本の模本[臨王維輞川図巻]を祖本とする。それに倣った清代の図巻を抜粋利用したと考えられ、選択された8モチーフについては、祖本の図様をほぼ忠実に伝えている。描法は、正統派南宗山水画様式に拠る。《為楽十事図》は典拠未詳ながら、典型的な北宗画系金碧山水図の描法を示す。日月山水松竹鶴亀鹿靈芝を組合せた《十長生図》も典拠未詳であるが、広く好まれた画題である。その描法は、基本的には北宗画様式といえる。これに対して、《雪中双雀図》は典型的な華椿系の画風を示す。一方、《雲龍図》が寺院なら

ぬ住宅の天井画に描かれる類例は、他には金沢の旧横山家住宅(康楽寺仮殿)・萩の旧毛利家別邸(長屋家)で確認できるが、きわめて稀である。なお、その筆墨法には岸派の特徴が看取される。

奥座敷前室：《四時春風図》《秋圃老容図》は、それぞれ春秋の花鳥図である。前者は典拠未詳であり、後者は、韓琦「九日水閣詩」に基づく秋草図[老圃秋容図]を本歌とするものと考えられる。両図ともに、南宗画風・南嶺画風・狩野派・雪舟派等、日中の広汎な画法を破綻なく折衷させて大画面を構成している。

奥座敷「鶴の間」：《蓬萊仙境図》は、『山海経』等に見える仙島の情景を主題とし、松竹梅に鶴亀の遊ぶユートピアとして流派を問わず広く絵画化された。本図の画風は南北両宗折衷である。一方、《草花図》(タンポポ・スマイル)には、清初の惲寿平ないしはそれに倣った我が国・華椿系の写生的著色没骨描法が窺える。

囲炉裏の間「梅の間」：《老梅図》は、構図・筆墨法ともに、岸駒(寛延2-天保9/1749-1838)筆同主題の大通寺書院(新御座)障壁画(天明6/1786)に近似する。但し、コーナーを有効利用した立体的な画面構成は、彭城百川(元禄10-宝暦2/1697-1752)筆同主題の旧多武峰慈門院(陶原家)障壁画(宝暦1/1751)と相通ずる。岸駒は岸派の祖、彭城百川は初期南画家。ともに中国絵画の雑多な学習に基づいて自己の画風を形成している。

「雁の間」：《蘆雁図》は、明らかに林良(明/15-16世紀)の筆意に拠っている。林良は画院画家ながら写意の水墨没骨描法によって文人からも評価された。我が国では、特に文晁系南画家による受容が顕著である。

4. 部屋の性質と障壁画との対応関係

表玄関取付き・表座敷「龍の間」：襖にパノラマ状に展開する楼閣山水図は、観者を「臥遊」の境地に誘う。加えて、その山水図の様式は正統派南宗画である。一部の小画面には北宗画様式を加味して多少の変化をつけながらも、中国趣味の横溢した建築意匠とあいまって、この接客空間は主客が中国文人精神を共有しうる空間として構成されているといつてよい。なお、《雲龍図》天井画の造形意図については後考にまきたい。

奥座敷前室：著色の春秋花鳥図である《四時春風図》《秋圃老容図》は、広間を華麗に荘厳するに相応しい。そして、その構成モチーフのうち「四君子」(=蘭竹梅菊)および菊・長春花はそれぞれ文人精神と不老長生を

象徴し、奥座敷との意味的連関を有する。

奥座敷「鶴の間」：祝賀・祝寿の画題である《蓬萊仙境図》によって統一されたこの空間は、主人・萬右衛門の居室に相応しい。

ところで、以上言及した襖絵・小襖絵のすべての画面において空間の余白に蒔かれた金砂子が、近世日本の諸画派が普遍的に用いた、やまと絵的な大画面装飾の手法であることはいままでのない。この点において当該障壁画は巧みな和漢折衷であるともいえよう。

囲炉裏の間「梅の間」：「四君子」「歳寒三友」に数えられる梅はいうまでもなく文人精神の象徴であるが、その老樹を堂々と描いた《老梅図》は、ここに集う家族にとっては、家長たる萬右衛門の象徴でもあったに違いない。

「雁の間」：《蘆雁図》は普遍的に好まれた画題ではあるが、「雁行」「雁序」が兄弟秩序の比喩である点を考慮すれば、同図には子弟の生活空間に相応しい鑑戒の意味が込められていた可能性が高い。

5. むすび

このように、高橋萬右衛門家住宅においては、障壁画

によって部屋の性質を象徴させようとする明確な構成理念の存在が指摘できる。むろんこれは、施主・萬右衛門と画家・竹侶との協議に基づくとはいえ、それを具現化ならしめたのは、竹侶の卓越した多量大画面処理能力にほかならない。佐藤耕雲『菅原竹侶先生之伝』(明治24/1891)によれば、竹侶はたびたび武家殿館や行在所の大規模な障壁画制作を命ぜられているが、南画家としては珍しいそうした画歴に加えて、嘉永・明治の両度にわたる江戸・東京遊学において習得した画域の広さが、多彩な技法を駆使した高橋萬右衛門家住宅の障壁画制作に際しては十分に反映されているといつてよい。

すなわち、当該障壁画は、単なる地方南画家の作品として看過すべきものではない。菅原竹侶という、正統派南宗画・北宗画を兼ね、また南蕨画風や日本漢画系諸派にも精通しつつ障壁画家としてのキャリアも十分という特筆すべき画人が中国文人趣味を基調として単独で制作した障壁画群であるという点において、高橋萬右衛門家住宅の障壁画は、その中国趣味あふれる建築意匠とともに、東北地方における同時期、稀有の事例として貴重であるといえよう。

[表1] 高橋萬右衛門家住宅 障壁画一覧

部 屋	配 列	形 状	員 数	画 題	分 類	材 質 技 法	様 式
表玄関取付き	東側	襖貼付絵	3面	海廊観瀑図	山水	紙本著色	南宗画
	南側	襖貼付絵	2面	寒江独釣図	山水	紙本著色	南宗画
	北側	襖貼付絵	5面	蜀山行旅図	山水	紙本著色	南宗画
表座敷 「龍の間」	上面	天井板貼付絵	1面	(雲龍図)	龍魚	紙本水墨	諸派折衷 (岸派)
	東～ 南側	襖貼付絵	8面	鞆川図	山水	紙本著色	南宗画
	西側	付書院腰小襖貼付絵	2面	(雪中双雀図)	花鳥	紙本著色	南宗画
	北側	天袋小襖貼付絵	4面	十長生図	花鳥畜獸	絹本著色	北宗画
	北側	地袋小襖貼付絵	2面	為楽十事図	山水	絹本著色	北宗画
小座敷	北側	押絵貼襖	2面	松陰高士図*	山水	紙本水墨	南宗画
				秋山暮靄図*	山水	紙本水墨	南宗画
	西側	天袋小襖貼付絵	4面	(金山寺図)	山水	紙本淡彩	南宗画
	西側	地袋小襖貼付絵	2面	(風景図)	山水	紙本淡彩	南宗画
奥座敷前室	東側	襖貼付絵	5.5面	秋圃老容図	花鳥	紙本著色	南北折衷
	西側	襖貼付絵	6面	四時春風図	花鳥	紙本著色	南北折衷
奥座敷 「鶴の間」	東側	襖貼付絵	3.5面	(蓬萊仙境図)	花鳥	紙本著色	南北折衷
	西側	襖貼付絵	2面	(蓬萊仙境図)	花鳥	紙本著色	南北折衷
	西側	地袋小襖貼付絵	2面	(蓬萊仙境図)	虫魚	紙本著色	南北折衷
	北側	障子腰板絵	4面	(草花図)	花鳥	板地著色	南宗画
	北側	付書院腰板絵	2面	(草花図)	花鳥	板地著色	南宗画
囲炉裏の間 「梅の間」	南～ 西側	板[桐]戸絵	9面	(老梅図)	花鳥	板地水墨	諸派折衷 (岸派)
「雁の間」	東～ 南～ 西～ 北側	板[桐]戸絵	11面	(蘆雁図)	花鳥	板地水墨	南宗画的 画院画風 (林良)

[凡例] ① () を付した画題は図様から判断して著者が適宜命名したもの。それ以外は款記に従った命名である。

② *は陳石(伝未詳)筆。それ以外は、すべて菅原竹侶 筆である。

*相模女子大学 講師・文修

Lect., Sagami Women's Univ., M.A.

**名古屋工業大学社会開発工学科 助教授・工博

Assoc.Prof., Nagoya Inst. of Technology, Dr.Eng.